

ストラスブール大学・国際学会「日本と欧州の出会い」から

稲賀 繁 美

フランス東部、ドイツとの国境に位置するアルザス地方の中心都市、ストラスブールでは、クリスマスが近づくと、大聖堂を取り囲む旧市街の中心地に、欧州でも最大規模といわれる多様な夜店が軒を並べる。日暮れ時ともなると、通りを横断した飾り付けに照明が点され、繁華街は、地元のみならず各国からやってきた観光客で、ごった返す。山折哲雄前所長の視察旅行に随行して訪れたのは、新緑に藤の花が美しい頃だった。それから半年、冬の夜明けは遅く、内陸の都市の川面には朝霧が立ち込め、空が雲に覆われると、俄かに気温も下がって寒風を呼ぶ。年の暮れの近いことも肌で実感される。

大聖堂から徒歩で数分、ストラスブール市民ご自慢の清潔な路面電車の線路を跨いだ反対側に位置するストラスブール、マルク・ブロック大学では、二〇〇五年十二月八日から十一日にかけて、「第三回日本研究会議」が開催された。今回は話題として「日本と欧州との出会い」発

見のイメージ」が提起された。フランスのみならず、ドイツ、オーストリア、イタリア、さらにはスイス、イギリスに広がる多方面の、第一線の日本研究者が多数参加した。創立二十周年を迎えた日文研の、海外研究者との交流の将来を考えるにあたって、参考になるところの多い会合として、以下にその概要を報告したい。

会議の組織はマルク・ブロック大学(UMB)の日本研究学科、それにアルザス・ヨーロッパ日本研究センター(CEEJA)の協賛という体裁だった。このCEEJA(通称セージャと発音する)はアルザス地方でストラスブールから南に七十キロほどに位置する歴史的な中世都市、コルマルの近郊に本拠を置く施設。創設の折には、長年パリの東洋語学院(INARCO)の日本語・文学専攻の名物教授であり、フランスにおける日本語・文学・文化研究の量的・質的な地位向上に大きく貢献し、日文研の客員教授も勤めたJean-Jacques Orgasが、INARCO定年退官後に所長として就任する予定だった。だが周囲からも惜しまれたオリガス氏の早すぎた死去に伴い、アルザスの地方行政担当者として日本との友好に長年貢献してきたAndré Klein氏が周囲に請われて所長に迎えられる。Sakae Murakami-Giroux教授はじめ、ストラスブール大学の日本学関係者数名が兼任で運営に当たっている。

なぜ、ストラスブールなのか、その説明が一言必要だろう。今回の会議実現についても、ストラスブール大学での開催に関しては、マルク・ブロック大学の東洋学研究グループの支援を得て、大学本部の広大な建物の、天井まで十メートルはあろうかという、シャンデリアの灯った三百名収容の大会議室で全体会議が持たれ、開会には学長自らが出席された。これは、例えばパリの第四大学、通称ソルボンヌでなんらかの国際学会を催す場合などには到底考えられない、破格の待遇といつてよい(そもそもソルボンヌにはこのような大広間は存在しない)。そ

ここには、学長自らの言葉にもあったように、アルザス地方と日本との経済界での結びつき、そして学術的な提携の深さが無視できない。実際、大学における日本語の受講者数は、英語について、外国語としては第二位を占めるに至っている。

会議の後援には国際交流基金のほか、アルザス地方政府、上部ライン県評議会（県議会に相当する）、ストラスブールに置かれたフランス日本大学会館およびストラブルールの日本総領事館の名前が連なっている。国際交流基金では部長格の人材をパリ日本文化会館の副所長に送り込み、欧州との学術交流に本腰を入れている（ちなみに、パリ日本文化会館は、フランスの法人組織であり、国際交流基金は人材派遣、出向というかたちでその運営に関与している）。アルザス地方政府および上部ライン県評議会の関わりも、けっして名目にとどまるものではない。この面にはクライン氏の人望のみならず、政治・行政関係者との太い信頼の絆が役立っているようだ。CEEJAの運営にはこれら地域政府と議会からの積極的な財政支持があり、いままでの文化事業や学術活動の実績を背景に、日本との交流に優先的に施設の提供を図ってきた経緯がある。これまた、各国相手の文化事業の均衡が優先され、とりわけフランス語圏アフリカや、中近東に重きを置く傾向の強い首都パリでは考えられない優遇措置であり、またストラスブールに本部の置かれたヨーロッパ共同体でも、近年、アジア関係では中国に優先順位が置かれて、日本関係の学術協力計画への資金提供が困難になっているのとは、大きく様相を異にする。フランス日本学生会館が当地に置かれているのも、こうした背景あつてのことだ。アルザスと日本との強い関わりについては、ストラスブール日本総領事館も十分な認識を持っていた。

初日八日午後、François-Xavier Cuche 学長の挨拶につづき、開会の講演として、東京大学の三浦篤氏が「日仏の芸術上の交流の三様相：日本趣味、Raphael Collin、近代日本絵画」と題する発表。二台の映写機を併用しての見事なフランス語での講演は、現在中堅の日本人博士号取得者代表の実力を遺憾なく発揮した。ラファエル・コランは、黒田清輝や久米桂一郎から和田英作さらには山下新太郎、児島虎次郎にいたる世代の画家たちの師匠として、近代日本における洋画の発展を考えるにあたって軸となる画家。だが、その再評価は三浦氏自らが中心的企画者となった回顧展の実現まで、むしろフランス側ではほとんどなされてこなかったに等しい。その評価の落差に交流の実相を計る模範的な基調講演だった。

これを受け、センスベリー・日本美術研究センター所長の Nicole Rousmaniere が、日本趣味の時代に大英博物館の保存官だった Augustus W. Franks と滝川式胤との交流に焦点をあて、ヴィクトリア朝英国での日本磁器蒐集の濫觴を再構成（英語）。今日に至るまで英国では東洋陶磁器研究が博物館の大きな分野を占めているが、その起源を探る一次資料が、大英博物館には今なお手付かずで多数残っている。つづいて稲賀が、二十世紀後半に時代を移し、京都の前衛陶磁器の鬼才と謳われた八木一夫を、同時代の世界美術史の動向のなかに、「陶芸家」としてではなく「芸術家」として位置づけ直す試み（仏語）。さらにチェルシー美術学校の Toshio Watanabe 教授が、お雇い外国人として十九世紀末に英語で初めての日本庭園論を著述したジョサイア・コンダーを論じた（日本語）。今日の常識ともいえる、京都の禅寺を中心とする日本庭園観パラダイムとは異なる、大名庭園を中心とする価値観にそって、コンダーが日本庭園論を展開した点が強調された。ルーマニエル氏と渡辺氏とともに、この直前の十一月に日文研で開催した「京都を中心とする日本の伝統工芸再考」国際シンポジウムにお招きした方々だった。

総じて、これら三つの発表に共通するのは、価値観の問い直しだろう。従来の欧米近代中心の美的価値観がもはやその普遍性を主張できなくなってきた現時点から翻って見れば、支配的価値観の生成に預かった力学の動態は再検討に値しよう。また、欧米の日本文化論の基底に見えるこれらの規範的価値観は、日本という異文化との接触を媒介として成立したもののだが、それらはいかなる理由から、日本と欧米とで齟齬を来たしたまま存続してきたのだろうか。

質疑応答でも、磁器中心のロココ以来の欧米での極東陶磁趣味が、十九世紀末以降、いかに軟質陶器への関心へと脱皮したのか、中空を宿した器を焼成する窯業が、どこで彫塑とは一線を画すのか、といった疑問が提起され、議論は夕食の席に持ち越された。

二日目九日午前は、Josef Kypuriz 氏司会のもと、主としてウィーン大学の面々が、いずれも英語で発表。Ingrid Getreuer-Kargl 氏は、十六世紀の南蛮期初期旅行者（ルイス・フロイス、エンゲルベルト・ケンプファー）と十九世紀後半以降の欧米旅行者（P・F・フォン・ジーボルト）による日本女性に関する見聞を比較。Sepp Linhart 教授は明治以降の日本風物に話題を絞り、公衆の面前に裸が頻出する日本の風俗に外国人観察者が当惑した様を具体的に分析。当時の日本で出版された絵入り新聞記事なども援用されたが、絵を囲む額縁を支える子供の天使が、欧米起源の翼の生えた裸体を晒している。こうした舶来の図像表象に、当時の日本側の公衆が逆に違和感を覚えることはなかったのだろうか。ここにも見られるような相互の知覚の葛藤を、家族観に関する学説の水準で綿密に分析したのが、リンハルト氏の同伴者でもある、Susanne Formanek 氏。Max Weber はインドにおける隠棲に比較できるものとして、日本の inkyo に言及している。これについて中村元は「隠居」に相応しい独訳をヴェーバーは見出せ

なかったと主張しているが、原典を確かめると、そこにはちゃんと *Alentei* が当ててある。中村元はどうしてこの事実を見落としたのか、という文献学的訂正から議論をはじめたフォルマネク氏は、さらにそこから、穂積陳重のよしげが『隠居論』（一八九一）で「隠居」を人類普遍の慣習とみなし、とりわけドイツ語圏の *Alentei* との長大な比較に紙面を費やしているながら、一九一五年になると「隠居」を日本特有の社会的美德として、西欧社会との差異を強調して行く経緯を、学説上の変貌や民法解釈上の論争にも踏み込んで詳述した。文化間の差異は拡大鏡で誇張される半面、同一文化内部でのすれ違いや不協和音は、ともすれば見逃されがちだ。この知的刺激に富んだ執拗にして鋭い分析は、民法をめぐる比較文化論の可能性を示唆してやまない。つづく立教大学の荒野泰典教授は、十七世紀の平戸の商館に関し、当時の一次資料を駆使して立地環境を復元し、そこを舞台に観察された「ニホンカタギ」の構造に論及した。フォルマネク氏の発表は、それから二世紀半ほど後に、そうした慣習が法制として制度化されるに及び、戸籍法を始めとする国家体制論へと発展した様相に切り込んだもの、と評しうる。

同日午後は、*Jacqueline Pigeot* バリ第七大学教授の司会で、哲学・文学に展望を開いた。まず大阪大学の望月太郎講師が、フランス哲学との出会いとして、九鬼修造くきしゅうぞう、澤瀉久敬わたかひひさたか、森有正もりありまさを論じようとしたが、三十分の持ち時間では、これはとても無理だった。日本の関係者なら誰でも知っている哲学者の業績を、フランス語でも意味をなすようなかたちで提起することが、絶望的なまでにむづかしいのは、なぜなのか。それがあらためて問われるべきだろう。ハイデルベルクの *Wolfgang Schamoni* 教授は「自家製の英語」と謙遜しながらも見事な話術を駆使し、明治中葉の日本における *Lessing* の戯曲「賢者ナータン」の「三つの指輪の喩」受容に関する蘊蓄を披露した。ここに見えるユダヤ教、キリスト教、回教（ママ）の優劣を巡る諍いを回

避する知恵については、早くも大西祝『六号雑誌』百六十九号、一八九五年で、『鳩翁道話』にみえる明徳の玉の譬喩（ここでは神儒仏の優劣が話題とされる）との類似が指摘されていた。もつとも、丸山真男の言葉を借りれば「思想的雑居」が常道の日本だからこそ、寛容を説くレッティングの喩も大きな刻印を残すことはなかった、とするシャモニー氏の結論には、やや飛躍があるだろう。外来の要素は、親しめるものだからといって好まれる場合もあれば、逆に忌避される場合もあり、異質だからというので珍重される場合もあれば、かえって敬遠される場合もあるのだから。

故オリガス教授はじめ、当地の日本文学研究者とは長い交友をお持ちの、早稲田大学、中島国彦教授は「自我」という言葉に話題を移し、日本近代文学におけるその変容ぶりを、森鷗外から坪内逍遙、二葉亭四迷から漱石さらに林芙美子にまで渡って、きわめて明快な日本語で展開した。面白いことに、こうした「主題と変奏」という形式の発表は、フランスの学問作法ではほとんどお目にかからない。論証ではなく学識の開陳に意義を認める日本的学術の典型的な姿は、欧州ではどのような評価の対象となるのだろうか。立命館大学の神林恒道教授は「青木繁と日本のロマン主義」を格調高い日本語で弁じた。これには日本側の美術史家から「明治浪漫主義」のうちに青木を位置づける姿勢、あるいは「後印象派」以降のモダニズムを基準として青木の限界を評定する座標軸そのものへの疑義も提起された。ドイツ式概念整理を経た欧州の思潮に沿って日本近代を解説する方法はどこまで有効で、どこに限界があるのか。とりわけ青木繁に関しては、代表作の『海の幸』に日露戦争直前の世相を読むような新解釈（画中大獲物となっている鮫は、バルチック艦隊の隠喩となる）も登場し始めており、従来の定説は大きく塗り替えられようとしている。これは、さらなる討論が必要な領域だろう。

薄暮も迫るなか、「引退教授の閑談」との枕で登壇したが、元ジュネーヴ大学の二宮正之教授。定評ある見事な仏語での即興講話は、一座の聴衆を魅了した。主題は中島教授とも相補うもので、「私小説の国」において、André Gideの「裂解した我」がいかに受容されたか、との主題。一九一〇年代初頭の上田敏による倫理的な受容、二〇年代の永井荷風による入れ子細工 (mise en chime) の小説技法への関心、三〇年代辰野隆から小林秀雄に至る自我への懐疑（我の表現から「社会化された我」を経て、自我の実験室たる『贗金作り』へ）、戦後の『コンゴ紀行』に作家の良心の限界を見る野間宏の批判、さらに「思考の導師」たる晩年のジッドと朝鮮戦争下で文通し「日本への遺言」を受け取った中村光夫までが、明晰に腑分けされた。長い一日の最後はSOASのStephane Dodd。闇と黒の暗喩を通してBaudelaireの倒錯と梶井基次郎の結核体験とを結び付けようとする試みには、論者による鏤刻の英語翻訳により、梶井の散文とボードレールの散文とが交互に朗読され、夕闇に沈む会場を沈鬱なる思索へと誘った。

第三日。早朝からバスが一行を迎えにやってくる。コルマルまでの移動は貴重な学術交換の機会となる。小一時間ほどで内陸の小ヴェネチアと呼ばれる町にはぐり、Chateau Kinerの敷地の、こぢんまりとした会場に入る。庭一面の落ち葉に陽光が斜めから射して眩いばかり。五十名程度のセミナーには、簡素だが好都合な設備である。その受付の棚のうえには、今は亡きオリガスさんの、簡素な遺影が慎ましく掲げてあった。

午前中冒頭はSuzuki Tae教授によるロドリゲス『日本大文典』*arte da lingua de Japon*の分析。長崎で一六〇三年に刊行されたこの書物によって、世界で初めて欧文による日本文法解説を試みたロドリゲスは、最初の段階では日本語の助詞をも Luiz Alvarezのラテン語文法典に従い、

ラテン語の格変化になぞられて記述しようと苦心する。だが途中の段階からこれを放棄し、日本語に固有の範疇として助詞を取り上げるといふ転換を見せている。これは、ラテン語文法を普通文法として、その鑄型に異国語を流し込もうとする努力が挫折する軌跡を浮彫にする。ロドリゲスの文法典が再発見されたのは二十世紀初頭だが、そこには十七世紀日本語の音韻と文法とが冷凍保存されていただけでは無い。遭遇した異文化を取り込もうとして、範型とした自らの枠組みの有効性が喪失するという、自らの土台を揺るがす事件が、ここには生々しいかたちで記述されていたことになる。論者のスズキ教授は、学会組織者のジル・ムラカミ教授ともども、サン・パウロ大学出身の日系ブラジル人。ポルトガル語にも通じた多言語使用者ならではの優れた発表だった。

続くヴェネチア大学の Aldo Tadini 教授はイタリア人宣教師 G. B. Sidotti と新井白石との有名な出会いを話題に取り上げた。私見では、この問答の背景には、西欧での形而上・形而下の区別と、これを横断してしまう宋学における窮理概念との思想抗争があるだろう。つづくロンドン大学 S. O. A. S. の Lucia Dolce は十九世紀西欧における日本仏教研究を振り返り、十九世紀の図像解釈・文献中心の研究が、人類学的な儀礼や祈祷に踏み込む典礼研究へと変貌を遂げた様子を、西側学術のパラダイム転換として解説した。同様に宗教研究を話題として、きわめて専門的な議論を展開したのが、フランス極東学院の Frédéric Girard 教授。江戸時代初期にキリスト教を批判した書物のひとつ、臨済宗の僧、雪窓宗崔（Hakusei, Sōsui）による『対治邪執論』（一六四八）の簡略な日本語版は、類書としては例外的に論争口調を控え、ザヴィエル以来の日本での布教の状況を的確に記述している。これとは対照的に、その長文の漢文版は、教義上の論駁を主調としていいるが、その論駁部分の大半は、現行の『日本思想大系』からは脱落している。そもそもなぜ

こうした取捨選択が和文と漢文とのあいだでなされたのか。漢文記述における排耶蘇議論は、当時の日中の仏教界にあつていかなる意義を担っていたのか。雪窓宗崔が天草、長崎で民衆から得た絶大な信頼と、黄檗宗の隠元禪師の日本来訪との関係は、と議論は展開してゆく。

午後はパリ高等研究院の Francine Hérail 教授の司会で、外交史に絡まる話題を中心に発表が続く。パリ第七大学の Annick Horinouchi 講師は、きわめて明快なフランス語で、ケンベルの『日本』の鎖国を論じた部分が長崎通詞によって翻訳され、日本人の文化意識、さらには国体意識の発揚に寄与した経緯を論じた。ストラスブールの Christiane Seguy 教授は『阿蘭陀風説書』の初期から最後まででの消長を、世相の変貌との関連で鳥瞰し、幕府の中枢に機密文書として死蔵されたに等しいこの文書の、文化史的意義と政治的効能の限界を分析した。ヴェネチア大学の Adriana Boscaro 教授は、日本とイタリアの文化交流史をフランス語で巧みに語り、岩倉使節団や成島柳北の旅程から、漱石の無関心、さらには、サヴォナ・ローラと日蓮を比較した有島武郎や上田敏の関わり、最初期のヴェネチア・ピエンナーレに関与してヴェネチア大学で教鞭を取った日本人たちや、画家、川村清雄に言及。幕末から明治初期の使節団の動向は、続くルーヴァン大学の Willy Yande Valle 教授が、ベルギーとの関わりから取り上げた。一八六七年のパリ万国博には、幕府のほかには薩摩藩なども参加しているが、その黒幕となった通称「モンブラン伯」なる人物については、従来、経歴にも、なお不明瞭な点が数多く残っていた。田辺太一『幕末外交談』にも登場する白山泊には、『鳩翁道話』の部分訳も知られている。日欧の交流史を紐解くと、同様に謎に包まれた人物が散見される。ケルン大学を退官した Helmut Feldmann 教授が取り上げた Wenceslau de Moraes (1854-1929) もその代表のひとつだろう。日露戦争後のモラエスの日本帰員、さらには還暦を迎えて、鴨長明の『方丈記』に模し

た、彼の徳島への隠居。その背景には、外交的な劣勢に立たされた母国ポルトガルの刷新への希望と、神戸・大阪領事として体験した、現実の母国の政治への落胆が隠されていた。美談として語られる日本人の妻との関係や、徳島での生活ぶりについても、自殺に終わった最期を含め、決して薔薇色とはいえない側面が、ロマンス語専門家ならではの格調高いフランス語を通じて照明された。

三日目の最後は、ハイデルベルク大学の Wolfgang Siefert 教授。竹内好の中国観を話題として、日本と欧州という軸での近代化論への異議申し立ての射程を探る試み。近代の日中比較としてジョン・デューイや胡適、バートランド・ラッセルらの観察にも目配りがなされた発表だった。拝聴しながら、五・四運動以降の文脈なら、抗日的な批評を連ねた上海時代の林語堂や、インドのタゴールの、ナショナリズム国際比較のなかでの日本批判などにも射程を広げる考察か、との感触を得た。ただ残念ながら参加者に思想史系の専門家が少なく、せっかくなの問題提起もやや空回り。司会の浅利誠氏は、竹内にはたとえばインドネシアへの日本の進出や韓半島支配に対する自己批判のないことを問題とした。それに関わる私見だが、竹内好は戦中期に中国東北部や西域でイスラーム教徒の社会を視察して「大東亜共栄圏」の経営に直接参画している。竹内のそうした実体験をも、かれの戦後の思想的発言と関連させて考察する必要があるそうだ。

最終日には、日本リフランス学生会館の Danielle Alexandre 女史の司会で、三つの発表があった。まずパリの社会科学高等学院の琉球研究第一人者 Patrick Belleverre が幕末から明治期にかけての日本と欧米の琉球認識に関して、専門的知識に裏打ちされた見事な概観。

Ryukyuu Studies 全十巻、またフランス語では *Le Voyage au Japon* (R. Lafond, Collection Bouquins, 2001) を編んだ実績を遺憾なく発揮した。島津斉彬の国際的な見識に関しては、阿部正弘や将軍徳川慶喜との関係で、東シナ海交易圏での薩摩藩としての役割が、狭義の「日本史」を超えた視野から再検討されるに値するようだ。つづいては、リヨンの東アジア研究院の Eric Seizeler が政治史に触れ、ポアソナードの民法案だけでなく、明治日本の立憲体制確立にフランスの政治思想がいかに貢献したかを検討した。普仏戦争敗戦後のパリ・コミュニンの共和主義思想が自由民権運動に直接反響を与えたとするのは、魅力ある仮説だが、類推には限界がある。また仏式中央集権体制に日本側が興味を示したにせよ、実際の施策はロシアや英国の体制の移植によって釣り合いを取っている。日本の近代化過程からフランス的要素だけを抽出しても、鮮やかな論証を導くのは困難だろう。この発表には末広鉄蝶の『あけぼの新聞』の評価について、フランスの研究者同士で高度な論戦が展開された。これには、出席していた日本人学者に議論の内容をフランス語で理解して反応するだけの学識と語学力を備えた参加者がなかったことを、自戒を込めて白状しておきたい。

第三には、ヴェネチア大学の長老、Francesco Gatti 教授がイタリアと日本の歴史記述におけるファシズム概念を比較した。ライシャワー、丸山真男から井上清にいたる研究者と親密な交友をもっていた論者は、日本の場合、近衛内閣、東條内閣にあっても専制が存在せず、イタリアやドイツのような政治体制上のクータに相当する断絶もなく、治安維持法の施行や美濃部達吉の天皇機関説への弾圧においても、それを安易に欧州でのファシズムへの移行とは同一視はできないものの、「天皇制ファシズム」といった用語法は、日本の異質性を分析するにもむしろ有効であり、ファシズム理解にも裨益しうるとの見解を披瀝した。私見ではここでも、先

のザイフェルト氏の竹内好に関する議論とも同様に、従来の思想史の枠組みでは見落とされてきた領域が無視できない。すなわち、共産主義者からの転向組が大挙して官僚として登用された満洲国における社会主義的統制経済施策と、ソビエト連邦に範を仰ぐ五ヵ年計画に基づく通信事業や技術革新、都市計画事業を、どのように日本のファシズムの文脈で理解するか、という問題を視野に納める必要があるからである。

全体を締めくくる講演は、INALCOのFrançois Macé教授に依頼された。このような晴れがましい任には耐えられぬと、謙遜に前置きされながら、マセ先生は神道とキリスト教との教義上の交渉を取り上げ、「相互の発見」をめぐる会議を締めくくるに相応しい話題を提供された。ファビアンの残した『妙貞問答』（一六〇五）が吉田神道に伝わったのは周知の事実だが、平田篤胤がGiulio Aleni, Diego de Pentzia, Matteo Ricciらの漢訳の議論を直接に参照しながら『本教外篇』を執筆したことも、村岡典嗣（ちむらぎのりつ）の指摘以来、今日では通説となっている。マセ先生はそうした事実を踏まえ、さらに新発見の史料も参照しながら、明治の神道刷新に貢献した平田の思想がキリスト教から強い感化を得ていた事実にあらためて注目した。そしてこれをとんなる貸借の問題に矮小化することなく、むしろ平田の神国思想の最深处において、神道と一神教とに見逃しえぬ収斂作用が働いていた様を探る必要がある、と結論づけた。

報告者は、幸いにもこの会合のすべての発表を傍聴する幸運を得た。この二十年ほどの間に参加する機会を得たこの種の学会のなかでも、今回の会合はもっとも知的水準が高く、最後まで緊張感の維持された稀な成功例との認識を得た。とはいえ、問題がないわけではない。ドイツやイギリスからの参加者の多くは、フランス語での発表を理解できず、またせつかく日本か

ら一流の専門家を招きながら、その多くは現地の言葉での質疑応答には対応できなかった。ジャックリース・ピジョーさんなどは、当方が報告の冒頭で英語による要約をしたものだから、てっきり全部英語で話すものと勘違いされた、という。「私は英語が大嫌いだから、腹が立って出て行ってしまったら、なんだ、あなたフランス語で発表したんじゃない。聞き落として損しちゃったわ」などと、翌日の昼食時に言い訳をされて、ふたりで大笑いした。

この種の会合の常ではあるが、総花的な話題では、議論が拡散することは避けられない。だが話題を絞れば、今回のような高水準の参加者を一堂に集めることもむつかしくなるだろう。次回以降に継続・発展を期待するならば、或る程度長期的な計画をいかに立案するかも懸案となってくるだろう。アルザス・ヨーロッパ日本研究所は、この会合のち、補修の必要が生じたキーナー城の敷地を離れ、さらに郊外の、キンスハイム・成城学園跡地の広大といつてよい場所に本拠地を動かした。こちらは宿泊施設も整い、図書室も充実しており、街中の喧騒を離れて、アルザス・ワイン街道ほど近くの大蔵で学術に専心できる利点がある。将来、この施設を活用して、日本研究に関するさらに充実した国際的な合宿会合が持たれるならば、上首尾だろう。その暁には、日文研としても積極的に協賛し、海外日本研究者ネットワークの実働に貢献できるのではなからうか。それは、人間文化研究機構の一員として期待される成果の一環を達成することにも直結するだろう。学会の組織・運営や会場の確保には、日文研側として大きな労力を割くことなく、地元の財政的援助と会場供与を得て、所期の国際学術交流を達成できるのなら、ここには大きな可能性があるだろう。

組織者のジル・村上教授の見事な手腕と、事務担当のアントナン・ベシュレールさんの周到な手配もあって、この画期的な会合の報告書は、まもなく刊行の予定と聞く。本稿がその案

内の道しるべとして、いささかなりとも役立つならば幸いです。

(ワシントンにて、二〇〇六年一月三十一日)
(国際日本文化研究センター教授)

日文研 三十八号 創立二十周年記念特別号

二〇〇七(平成一九)年五月二一日発行

編集 「日文研」創立二十周年記念特別号編集委員会

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社